

著者インタビュー

幕末の隠岐で自治政府をつくった
男たちの物語です

「きつかけは五木寛之さんの『日本幻論』なんです。私は島根出身なのに、この本を読むまで隠岐の自治政府のことを全然知らなかった。いつか書きたいとずっと思いつけていました」

「日本幻論」を読んだ1993年から20年、松本さんは初の歴史小説を書き上げた。「隠岐騒動」と呼ばれる隠岐の自治政

神と語って夢ならず

松本 侑子氏

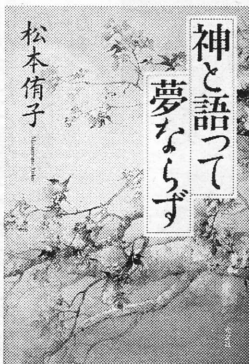
府とは、パリ・コミュニケーションより3年早い1868年に、「わしらの国をつ

まつもと・ゆうこ 1963年、島根県生まれ。筑波大学卒業。87年「巨食症の明けない夜明け」ですばる文学賞受賞。「赤毛のアン」全文訳・訳注つき翻訳「恋の蜆」山崎富栄と太宰治で新田次郎文学賞受賞。著書「赤毛のアンに隠されたシェイクスピア」私の青春文学紀行ほか。



くろうや」と、庄屋たち70人が決起、農民3000人も共に立ち上がった。しかし、なぜ隠岐なのか？

「隠岐島って辺境と思われていたし、私もそう思っていました（笑）、



松本 侑子

神と語って

夢ならず

江戸時代、日本海側は交 剣に考える人たちがいま 易船で栄えた物流の大動 脈で、隠岐はその通り道 主人公の井上登介は でした。幕末には、パリ 庄屋の息子で、京都で儒 一の三浦半島より先に、 教を学んだ尊王攘夷派。 イギリス船やロシア船が 来ても隠岐は、鎌倉時 来ていたんです。行き詰 代に後鳥羽上皇と後醍醐 天皇が流された土地だけ にあえぐ農民の暮らしを に、倒幕と勤王の気風が どうにかしたい、黒船か あった。一方、島を治め ら日本をどう守るか、真 松江藩（島根県）は徳 川親藩。隣の たことも、家系図からわ 川親藩。隣の たことも、家系図からわ 鳥取藩は水戸 藩の流れをく む勤王派とい う三つ巴の戦 いが背景にあ ちが背景にあ ちが背景にあ ちが背景にあ

「誰を主人公にするか、 隠岐に何回も通って悩み やこのお2人がすてきな ました。登介は日記や家 系図など資料も残ってい と、いい男なんですよ」

会話や心理描写などイ い出すときも、処刑こ るかお米とお酒を持たせ るんです。隠岐相撲 の、負けた人を痛めつけ ないという精神は、よそ ものが多く来る土地なら ではの知恵なのでしょう

負けた人を痛めつけない精神

人の「逝き方」を考える③

五木寛之

連載 9138回



人間の一生 「吾一人のため」という もそうだ。政 のが近代的自我の目ざめ 治や経済のシ だろう。

古 代、この国に伝 わってきた仏教 文化は、国家をまもる思 想だった。朝廷を守り、 体制を護持する。豊作を 願うのも、国家を支える 収税のためであり、共 同 体のために祈る宗教が仏 教だった。

「われ一人のため」の信

ときに、ご家族が訪ねて ころれました、と知らさ れて、ここで自分の話を 聞いている人びとこそが 自分の家族兄弟だ、と言 ったという。

「世の中安穏なれ」とい う言葉にだけ寄りかかる のは、親鸞像をデフォル メする危うさがありはし

「竹島も、184ある隠 岐諸島のひとつです。T P P、日米軍事同盟、中 央と地方自治など、この 本のテーマは現代につな がっています。私は登介 と違ってインターナシヨ ナル派ですが、国をよく したい、自分の住む地域 を大事にしたいという情 熱に共感します」

(光文社 1800円)